

寺社Now

www.jisya-now.com

寺社の"いま"を伝える情報誌

vol.29

巻頭インタビュー

全日本仏教青年会 理事長

谷 晃仁

神道青年全国協議会 会長

金田 祐季

特集 1

地域活性化にもつながる取り組み

SDGsと寺社振興

特集 2

求められている場所に出向く

サテライトな傾聴

寺社Now

寺社の“いま”を伝える情報誌

Vol.29

表紙および巻頭インタビュー撮影：
奈良県斑鳩町「門前宿 和空法隆寺」



02 巻頭インタビュー 全日本仏教青年会 理事長 谷 晃仁 神道青年全国協議会 会長 金田 祐季

青年会だからできることが必ずある。
そのニーズも責務も増えてきている。

08 動静
国連観光・文化京都会議2019でSDGsを議論

09 未来考創
駐大阪・神戸米国籍領事館 首席商務領事／ジェイ・ビッグス
寺社に必要とされる情報発信

10 新風
NEWS 1 / 令和2年度予算案が閣議決定。ついに観光庁関連で「寺泊」が登場
NEWS 2 / 陶山神社(佐賀県)で、先代から続く陶器製の授与品が若い世代に話題

11 特集1 寺社が主体となり地域を元気にしていく世界的な取り組み SDGsで寺社振興

12 境内を活用した多角的展開でママを孤立させない環境を
山名八幡宮(群馬県)

14 サイクリストへのもてなしから、地域を巻き込む島興しへ
大山神社(広島県)

16 寺社の活動はそのものがSDGs。地域が果たせる役割は無限大
JTB総合研究所首席研究員 熊田順一

伝統を未来へ～From the Past to the Future～

18 長浜の観音信仰を、寺を守る人と共に広める
「観音ガール」対馬佳菜子(滋賀県)

19 祭の本当の楽しさを伝えたい
マツリテーター・大原 学(東京都)

20 特集2
求められる場所に出向くサテライトな傾聴
公益財団法人シャンティ国際ボランティア会(東京都)／グチコレ(京都府)
／お坊さん喫茶(大阪府)

24 参道をゆく
地域のためになることを考え、観光施策に協力しながら信仰を広める
白山比咩神社×地域住民×白山市(石川県)

26 テラハクレポート／御師のいえ 大鴈丸 hitsuki guesthouse & cafe (山梨県)

29 寺社に関する話題の動画をピックアップ
訪日外国人向け啓発動画／一般財団法人関西観光本部

マンション



商業施設



賃貸住宅
「シャーマゾン」



積水ハウスの 土地活用

オフィス



高齢者向け
住宅



クリニック



土地を活かす。地域が活きる。

土地活用とは、土地の価値を地域に活かすこと。積水ハウスは、住宅のリーディングカンパニーとして培ってきた総合力で土地の可能性を引き出してきました。入居者の多様なニーズに対応する賃貸住宅「シャーマゾン」や高級感あふれる中高層マンション、時代が求める高齢者向け住宅など、地域貢献につながる土地活用を積水ハウスがご提案します。



積水ハウス株式会社 西日本特建支店

〒531-0076 大阪市北区大淀中1-1-93 梅田スカイビルガーデンシックス4F



土地活用に関するご質問やご相談についてもお気軽にどうぞ。

0120-131-470

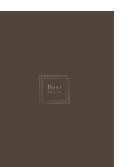
西日本特建支店

検索

資料をご希望の方は、フリーダイヤルでご請求ください。
ホームページからもお申し込みいただけます。



積水ハウスの賃貸住宅
「シャーマゾン」総合カタログ



積水ハウス西日本特建支店 実例集
[Best Solutions]

全日本仏教青年会 理事長

谷 晃仁

たに
こうにん

谷 晃仁
昭和51年群馬県生まれ。天台宗示現山延命院永福寺(群馬県)住職。平成29年より全日本仏教青年会副理事長、天台仏教青年連盟第24代代表を務め、平成31年6月より現職。天台宗内で人権啓発委員、防災士協議会役員も務める

青年会だから
できることが
必ずある。
そのニーズも責務も、
増えてきている——谷



■昭和24(1949)年に結成された神道青年全国協議会と、昭和52(1977)年に設立された全日本仏教青年会は共に、次代を担う宗教者が活動する団体。神道と仏教という違いはあるが、両団体が今、新たなリーダーを迎え、協働を模索し始めている。令和という時代の始まりにそれぞれの代表となった金田祐季会長、谷晃仁理事長に、これからの時代に向けてめざす方向性や社会との関わり方、寺社振興への思いを伺った。

神道青年全国協議会 会長

金田 祐季

かねた
ゆうき

金田 祐季
昭和54年鳥取県生まれ。平成14年大阪府立大学経済学部卒業。平成15年國学院大学神道学専攻科修了後、明治神宮に奉職。平成18年に因幡一之宮宇倍神社(鳥取県)に奉職し、平成31年4月より現職

宗教者の役割を模索する
時代に入っている

平成から令和へと移った、まさに変革期にリーダーに就任された。全国の青年宗教者の代表として今の思いをお聞かせください。

谷 全日本仏教青年会は9宗派4地域13団体が加盟し、約2万人の会員がいます。いろいろな個性が集まっています。それぞれの立場によって多少の違いはありますが、これから先を見据え、さまざまな経験をしていかなければなりません。青年会だからこそできることがあると思いますし、我々へのニーズや責務も大きくなっていると感じています。

金田 神道青年全国協議会は第二次大戦後に全国の神社と神職が存亡の危機に直面するなか、神道青年が結束して乗り切るために結成されました。それから70年経った今、求められている役割が変化してきているように感じています。この分岐点でどのように社会の役に立つべきか、約3500人の会員と共に考えていきたいと思っています。

谷 確かに、時代の要請に因應するのはもちろん、新たなことを生み出す努力も重要です。仏教も神道も伝統教団としてあるべき姿が土台となっています。私たちはその上に新たなものを発信するために活動していると考え、意欲的に動いて行きたいですね。成功失敗も含め、新しいチャレンジが必要ではないでしょうか。

金田 伝統を守っていくことはスタート地点です。その先に何があるかを考え、活動することが我々には必要だと感じています。神道と仏教、違いはありますが、共通点も多い。だからこそ手を取り合うことも増えてくるのではないのでしょうか。

谷 後継者や支援者、観光、祈りなど、考えるべき課題が実は多い。そのために今動く必要があるのですが、すぐに解決できるものではありません。30年ほど経ったあとに何らかの芽を出せるようにと考えて、現在があります。

金田 近年では地域との関係も重要な課題です。地域のコミュニティが崩壊しかかかっていても、そこに神職や僧侶がいれば、社寺の活動も地域もなんとか保つていきます。しかしコミュニティがあっても我々がないのでは、社寺も、根付いてきた文化や伝統も絶えてしまいます。

人が集まってくれば
新たな役割も生まれてくる

——地域のつながりを保つていく
ためにも寺社が必要ということですね。その意味では近年、寺社がさまざまな場として活用される動きが出てきています。

谷 コミュニティ活性化のスポット、場所としての価値が寺社は高いのではないかと感じています。最近では、寺社は今後もそれぞれが生活ができるかという話が出てきていますし、寺も神社も兼職している方が増えています。兼職者が多くなると留守がちな寺、人がいない神社というのも増えてくるでしょう。しかしありがたいことに今、寺社に場としての価値を感じていただける外部の方々が、さまざまな方法で活性化策を講じてくれています。おかげで寺社に人がまた集まり始めている。するとそこに求められる新たな役割が生まれることもあるため、我々宗教者が活動しやすくなってきているのではないのでしょうか。

金田 日本は本来、町や村がコミュニティの単位でした。これを前提としていろいろな生活経済が成り立

ち、伝統宗教も基盤にしてきたと思うのですが、コミュニティの姿が地域や住まいの中だけでなくSNS上に誕生するなど、別の次元に入ってきました。次々に新たなコミュニティが生まれている状態です。こういうときに神道や仏教がどのように社会に貢献していくのかというのは大きな課題です。そこを考え、活動していくためには既存、新時代どちらのコミュニティにもアンテナを張っていなければなりません。

自分を磨いていくことが
可能性につながるっていく

——とても可能性はあるが、難しくもある時代に入っているということですね。この大変革期に共に手を携えていくため、必要なことは何でしょうか。

谷 具体的なことはこれからですが、連携することで、超宗教という大きな輪を創り出せると思います。これまで私たちは、互いを深く知りませんでしたが、今こそ自分たちの活動を深く知り、磨き上げることによって協働を模索していけるのではないのでしょうか。私たち宗教者には、「祈り」という共通点がある。この根本理念

はこれから先どんな企画をやってもぶれない部分です。そういう姿を一般の方に見ていただくだけでも、神仏が習合している発信になりますし、たとえば一緒にボランティアをやることだけでも違ってきます。

金田 私は今季のスローガンに「大同団結」を掲げました。神職だけを見ても、専業、兼業がいます。その垣根を越え、みんなが仲間となって団結すれば、刺激し合い、新たな可能性が見えてくることでしょうか。これは神道、仏教の青年宗教者についても同じです。そのためには、情報が多様化している現代において、伝統文化だけでなく芸術、経済まで広く情報に触れていくことが個人レベ

ルで重要になってきます。変革期にある今、解決策には正解がないとも言われますが、やるべきことは個人の資質向上が第一だと思っています。

谷 根本に戻り、まず僧侶だけのネットワークをいかに創るか、そのうえで神職の方々と連携した超宗教として、例えば企業など外部の方々とつながり、何かができると思います。他分野の方々と協働すること、パートナーシップのつながりをつくることで、可能性やチャレンジが生まれるのではないのでしょうか。そういう意味で、私の任期中のテーマは「パートナーシップ」です。
金田 我々の先達は、例えば新生児の命名をはじめ、人生のさまざまな

社会に貢献していくために、 多方面へのアンテナを持つ。 それが未来を生む 力の源に——金田

親しげに話す谷理事長と金田会長。初めて会った時から課題認識を共有でき、共に取り組めることが出てくると感じたそう



全日本仏教青年会は、世界最大の仏教青年組織である世界仏教徒青年連盟(World Fellowship of Buddhist Youth / WFBY)唯一の日本センターとして、世界の青少年仏教徒を対象に、将来の社会的リーダーの育成や、伝統的仏教文化のグローバル化をめざして開かれる国際仏教徒青年交換プログラムに毎年参加し、日本でのプログラムも開催してきた。近年では、2017年に東日本大震災発生後の仏教徒の活動への学びを目的として仙台で行われ、令和2年4月にはテーマを「未来へ続くパートナーシップ」と掲げ、関西でも開催する



令和元年8月30日正午、新天皇による同年11月の大嘗祭を前に、世の中を靄い清める天下大祓が神道青年全国協議会により全国47都道府県で一斉に開催された。各地の神社には地域の住民も多く参列した。写真は厳島神社(右下/広島県)と北海道神宮(左下/北海道)での様子





「パートナーシップ」が 寺社振興にも つながっていく——谷

中心にあるのは「祈り」。 そのうえで誰もが訪れる 社寺でありたい——金田



ステージで相談などの役割を果たしてきました。これは神社と建物があつたからというだけでなく、そこにいる神職が幅広い知識を持ち、実践してきたからこそ成し得たことでしょう。そう考えると現代に生きる我々は少し専門職になりすぎていく気がします。だからこそ谷さんがおっしゃるように「パートナーシップ」が重要なのです。互いの知恵を持ち寄り、共有し、新たなものを生み出す力がここにあります。

求められる存在になる そのための情報発信

——**仏教と神道、宗教と地域など、多くのつながりが未来を創ります。ではその中で、寺社はどのような存在でありたいと思われませんか。お考えを聞かせください。**

谷 近年多発する災害によって、日本に古くからある助け合いの心が見直されています。例えば東日本大震災では、損壊家屋から多くの人が救助されましたが、そのほとんどは近隣住民の協力が成し得たものでした。また多くの人が、長く地域とつながってきた寺社へ避難もしてきました。このことを考えると、寺社を

光の観点からバリアフリーなども含めた情報を発信することも大切ですが、発信することで、人々がこちらを見てくれる。その中には、積極的につながりを持ってくれる人もいるでしょう。つまり情報発信から、関わってくれる人を増やすこともできるのです。人が増えればアイデアも増え、寺社振興にもつながっていくと考えています。

金田 神道の場合、発信の意味は寺院と少し異なるかもしれません。我々には「言挙げせず」という考え方があり、これまで積極的に発信してきませんでした。その結果、神道や神社についての情報が多様化しました。だからこそ今、受け継いできたものを正しく発信していく必要を感じています。そのうえでより多くの人とつながり、神社の活動への理解を広めることで新たな智慧が集まり、次の取り組みにつながっていくのではないのでしょうか。

谷 求められていることが何なのかを知ることも重要ですね。周りが我々に何を求め、そこに対してきちんと発信ができていますか。これができていて初めて、その先に我々の活動があると考えます。ニーズにマッ

防災の場として活用する方法を進めるのもひとつのアイデアです。それを神社でも推進してもらい、逆に神社側で新たな活用方法が見つければそれを寺院に共有するなど、似たような課題を持つからこそ、将来像も共有できる部分があると思います。

金田 防災の話で言うと、私はよく氏子などに「祭りは最大の安全保障」という話をします。神社は祭りをして、人が集まり、それを繰り返してきました。これがどれだけ地域の安全を保証しているか、ということをお伝えする必要があります。普段の生活ではコミュニティの素晴らしさがわかりづらくなっている現代だからこそ、神社がそれを伝える役割を担うべきだと感じています。祭りを続けるという、神職の役割は大きいと思います。

谷 つまり寺社は地域に根付いた、コミュニティの核をこれからも担っていく場でありたい、ということとです。そのような場であるためには、情報発信も重要になります。私の立場で言えば、青年会として全国の青年僧侶へ向けたもの、地域寺院として住民に向けたものがあります。近年は国内外から全国の寺社に足を運ぶ人も増えていきますので、観

チした活動で、日常生活の中に溶け込んだ宗教者になっていけるといいですね。

金田 寺社は常に祈りと共にある場所です。神棚や仏壇が家庭からどんな姿を消している状況ではありませんが、祈りが生活からなくなってしまうのはいけません。神社や寺院の存在を多くの方に知ってもらい、関わってほしいのですが、その中心にあるのは祈り。そのうえで、誰もが日常的に訪れる社寺になっていかなければと思います。



神道青年全国協議会
〒151-0053
東京都渋谷区代々木1-1-2
TEL : 03-3379-8011
<http://www.shinseikyo.net>



全日本仏教青年会
〒869-2225
熊本県阿蘇市黒川1125-1
西蔵殿寺別館内
TEL : 090-4997-3843
<http://www.jyba.ne.jp>

観光や地域活性につながる各地の話題を紹介します。今回は「寺泊」関連が盛り込まれた令和2年度予算編成、授与品を地域活性に役立てる神社の取り組みです。

NEWS 1
東京2020に向け、宿坊ツーリズムを世界に発信
令和2年度予算案が閣議決定。
ついに観光庁関連で「寺泊」が登場

■令和2年度の政府予算案が閣議決定された。官公庁関連予算は、前年度比0・5%増の約715億円。今年度はオリンピック・パラリンピックの開催年でもあり、訪日外国人旅行者4000万人達成という目標に資する分野に重点的に配分されているのが特徴となっている。

なかでも、お城に泊まる「城泊」と並んで、「寺泊」が初登場したことに注目したい。これは全国各地の寺社を日本ならではの文化体験ができる宿泊形態として活用することで、訪日外国人旅行者を地方へ誘客し、長期滞在や消費拡大を促進しようという狙いもある。

支援の対象としては、インバウンド対応に伴うリフォーム、他言語対応、WiFi環境の整備、洋式ト



全国寺社観光協会監修の宿坊「和空 三井寺」をはじめ、世界が日本の宿坊文化に注目している。このニーズに呼応した動きを、今後もフォローしたい

イレの整備、インバウンド向けの体験コンテンツやツアーの造成、寺泊専門家派遣の実施などが想定される。これにより、宿坊の改装や改築、新規開設を検討する寺社も増えてくると思われる。

当協会はこれまで、観光庁による寺泊の政策化に情報提供などで協力してきたが、これからも引き続き寺泊を積極的に応援して行きたい。

NEWS 2

伝統工芸を取り入れた授与品で地域振興に寄与する
佐賀県の陶山神社で先代から続く
陶器製の授与品が若い世代に話題

■佐賀県有田町は、いわずと知れた有田焼の産地。有田焼の名工による鳥居や狛犬で知られる陶山神社では、先代宮司が磁器製の授与品を発売以来、神社内のガス窯や電気窯で製造して頒布してきた。当代の宮田胤臣宮司になり、新たに陶器製の御朱印帳を考案して頒布を始めたところ、これがまた注目を集めている。

「有田は陶器のまちとして古くから知られています。陶器市には毎年多くの方が全国から訪れますが、伝統をこれからもより知ってもらうために神社ができることを考えました。住んでいる町のせともの店などで売られている陶磁器を見ても、それがどんなところで、どのように作られているか分からないものです。当社の授与品をきっかけに、有田へ足を運んでほしい」と宮田宮司。まちを歩き、工房などに立ち寄ってもらうことで、陶磁器の成り立ちを知ってもらいたいと考えている。

今後も新たな授与品を製作予定



狛犬や鳥居のほか、神社の見どころでもある桜と紅葉を宮司自ら描いた陶器製御朱印帳。絵馬や交通安全の御守など、ほかにも陶器製授与品を制作している

で、次は盛り塩の形をした置物。「玄関先に盛り塩を置く風習が近年減ってきています。このように存在が薄くなったり、忘れられてきている伝統文化について、続いてきた理由などに思いを馳せるきっかけになればうれいですね」。神社が発信するからこそ価値のあるこの取り組み。伝統工芸の産地にある各地の神社にも、活動の参考になりそうだ。

【陶山神社】〒844-0004 佐賀県西松浦郡有田町大樽 2-5-1 TEL：0955-42-3310 <http://arita-toso.net>

《日本の明日を寺社と共に。》

未来考創

寺社をテーマにした観光について未来志向で取り組む人を訪ね、日本の未来を共に考え、創造します。



ジェイ・ビッグス(左)／アリゾナ州のビジネススクールを卒業後、JETプログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme)に参加し、群馬県で英語教師として勤務。その後アメリカン大学大学院(在籍中は京都の立命館大学でも学ぶ)、日本貿易振興機構大阪本部(JETRO Osaka)インターン、米国商務省日本担当オフィスおよび中国担当オフィス、マンスフィールド・フェローとして東京で1年間滞在のあと、在中アメリカ総領事館を経て現職。写真右は、かれん・ケリー駐大阪・神戸米国総領事

寺社に必要とされる情報発信

第4回 駐大阪・神戸米国領事館 首席商務領事
ジェイ・ビッグス

寺社に関する情報発信はとても重要。
伝統文化と現代日本の生活とのつながり
僧侶との触れ合いなどに焦点を当て
日本文化の積極的な共有を。

廣瀬 外交官の視点から、日本の文化をPRする上でお寺や神社が担う役割は何だと思いますか？ また、より多くの人を魅了していくために、必要なものは何でしょうか？

ビッグス 日本を特別だと感じさせる要素のひとつが、伝統や文化が近代の日本人の生活に果たしている役割でしょう。官舎の近隣で神輿が通るのを見たり祭りに参加したり、お寺での豆まきに参加したり、お正月に近くの神社に初詣に出掛けたりするのは、私にとって日本ならではの楽しみです。ほかにも、七五三や子供相撲を見たり、十日戎にも参加しました。このような伝統文化と日本人の生活との結びつきは、インバウンド観光客にとって大きなセールスポイントになると思います。ただ、問題はそれらの行事に関する情報を、来日を検討する外国人旅行者が入手しづらいという点です。

廣瀬 寺社にとって世界に向けてその魅力を発信することは非常に大切と考えています。この点について外交官のお立場からご意見をいただけますか？

ビッグス 寺社に関する歴史的な情報は大切だと思います。同時に、インバウンド観光客を引き込むには、建物などを含む古来の伝統が現在の日本とどうつながっているのかに焦点を当てるべきだと思います。例えば私にとって、一番興味深かった日本での旅行のひとつに高野山の宿坊があります。高野山にある寺や神社は美しかったです。しかし、私にとって一番興味深く印象的だったのは、宿坊で一晚を過ごし、精進料理をいただき、早朝の勤行を拝見し、日本の古い伝統はまだ息づいていると実感できたことでした。このように観光客の興味を引くには、僧侶との触れ合いに焦点を当てることもひとつのポイントと言えるでしょう。



聞き手／廣瀬崇之
一般社団法人全日本
社寺観光連盟理事。元
内閣府特命担当大臣
秘書官、文化観光リ
サーチ株式会社代表

流に大切な役割を果たすと思いますが、この点で日本の寺社にどのようなことを期待しますか？

ビッグス 人と人との草の根交流は、国際関係の発展に大切だと強く思っています。関係構築の面で寺社が担う役割とは、寺社という神聖な場所によって具体化された価値が今なお人々に影響を及ぼしていること、知ってもらうことです。それが日本とこの国の人をよりよく理解してもらえることになると思います。外国人旅行者に対しても同じことが言えるでしょう。歴史を語るよりも寺社と現代の日本とのつながりに焦点を当てるべきだと考えます。現在の日本人の生活において、伝統的な寺や神社がいまだに大きな役割を果たしているという事実は重要であり、またこれは日本人が大切にすべきことです。この受け継がれている文化を、インバウンド観光客とも積極的に共有できると日本への理解が深まるのではないのでしょうか。

寺社振興と地域活性に関する、行政を中心とした最新の動きをご紹介します。今回は京都市で開催された国連観光・文化京都會議2019をご紹介します。



観光と文化に関する担当大臣や関係者など、世界各国の観智が集結した国際会議となった

NEWS 1

世界の大臣級が京都に集まり、持続可能な観光と文化について議論 国連観光・文化京都會議2019でSDGsの課題解決に添った戦略を議論

■国連世界観光機関(UNWTO)と国連教育科学文化機関(ユネスコ)の主催で、観光と文化をテーマにした国際会議「国連観光・文化京都會議2019」が、令和元年12月12、13日に国立京都国際会館で開催された。開会式で挨拶したUNWTOのマヌエル・ブトレール上級部長の「ツーリズムは地元や社会にマイナスの影響をもたらすこともあり、持続可能でなければならぬ」という言葉通り、SDGsという世界共通の課題解決を意識し、「将来世代への投資」観光×文化×SDGsをテーマに、文化の継承や地域コミュニティ、人材育成などに焦点を当て、SDGsの達成に向けて観光と文化の力をどう活用するかが議論された。文化観光のための革新的な政策と取組モデルの推進をテーマとした閣僚級会合のほか、分科会のひとつ「文化の伝播・継承による、観光の質の向上と相互理解」では、臨済宗大本山妙心寺塔頭退蔵院の松山大耕副住職も登壇。

本会議の結果として、①最先端の文化観光プロジェクトにおける革新的な政策とガバナンスモデルの実践、②文化の伝播と相互理解による観光の質の向上、③地域コミュニティの強化と責任ある観光の推進に向けた観光マネジメントの再構築、④文化観光の持続的な発展と共有価値のより良い理解に適した能力強化を盛り込んだ「観光・文化京都宣言」を採択し、閉幕した。

分科会では妙心寺退蔵院松山大耕副住職(写真)が登壇したほか、「地域コミュニティの強化のための観光マネジメントの再構築」「文化観光を持続的に発展させるための能力強化」などをテーマに開催された



京都宣言は、本会議の京都開催にあたり設置した専門部会において、宣言に盛り込むべきポイントを議論のうえ取りまとめ、実行委員会の承認を経て、国連へ提案した内容を踏まえて作成された。写真は左から、京都宣言を持つシンユネスコ事務局長、門川大作京都市長、西脇隆俊京都府知事、ブトレールUNWTO上級部長



令和元年11月に来日したローマ教皇は「すべての命を守るため」をテーマに掲げていた。その言葉と同義で「誰ひとり取り残さない」をテーマとするSDGs(Sustainable Development Goals)への取り組みが今、世界規模で急速に進んでいる。日本でも、各地の寺社では勉強会が開催されるなど、理解を深める動きも広まっている。しかし、「課題解決」のための目標ではあるものの、何から取り組むべきかわからないとの声もある。SDGsは、地域の未来のための取り組みにつながる。本特集では、そのヒントとなる事例、そして専門家による解説を紹介していく。

[2030年までの解決をめざす、SDGsの17の目標]



(SDGsとは何なのか、寺社との関係性は?)

生活文化のなかにある課題を解決するため、寺社が主体となって取り組める

SDGsには17の目標が設定されている(上のマーク参照)。そもそも2001(平成13)年に、MDGs(Millennium Development Goals)という、開発途上国の課題解決を目指した世界的な目標があり、これは2015(平成27)年に達成した。SDGsはその後継として、開発途上国だけでなく地球上の課題に関わるすべての

国と人とで解決していくために設定された。成長を目指すだけでなく生活スタイルや経済的な価値観にまで開発目標を踏み込んでいるため、身近な生活のなかから課題を考えると取り組みやすい。その点で考えると、日本人の生活文化に影響している寺社が主体となって取り組めることは多い。

SDGsで 寺社振興

寺社が主体となり、地域を元気にしていくきっかけにもなる世界的な取り組み

境内を活用した多角的展開で ママを孤立させない環境を



解決につながる課題



あそび場プロジェクトの新米試食会の様子。神道そのものに関心を持った山口氏(左)は、3年前に神職の資格を取得

地域課題の解決に向けて 神社を人々の集いの場に

「山名八幡宮リニューアルプロジェクト」と題し、大々的に改革をスタートさせたのは平成28(2016)年のことです。宮司の高井(俊一郎)は当時、神職の傍ら民生委員や市議会議員(現群馬県議会委員)をしており、その活動を通して感じた地域の課題解決に取り組みたいと考えていました。その思いと、神社を通して地域の活性化を図る仕組み作りに興味のあった私の思いが合致し、二人三脚で取り組み始めました」

そう語るのは、群馬県にある山名八幡宮の権禰宜・山口和也氏だ。氏はもともと社家の出身というわけではなく、都内の広告代理店勤務やバーの経営などを経験してきた。高井氏との出会いは、「まちづくり」をコンセプトにした活動を行うNPO法人シブヤ大学だったという。その後、高井氏は地域の活動に従事し、山口氏は海外での生活を経験する中で、「社会問題に対して神社だからこそ出せる解がある」という答えにたどり着いた。

社周りにビジネスを創出して収益事業で人を集めるというモデルを構築。最初の事業となったのが、4年前にオープンした「mico cafe」だ。

「宮司が地域でヒアリングしてきたなかで、子育てに困っている孤独なお母さんが多数いることがわかっていました。山名八幡宮は安産と子育ての宮ですから、まずはその解決から取り組もうと考えたのです。最初は月1回程度のイベントで、ベビーマッサージや笑いヨガの教室、本の読み聞かせなどを開催してました。やがて次第に市内の支援団体からもさまざまなお声がけをいただくようになり、常設のカフェを併設することになったのです。カフェをオープンすることにしたのは、お母さんたちが子育ての悩みを分かち合う場を作るというだけでなく、復職支援にもつながりたいという思いも

あつてのことでした」

境内に子供たちの声が 神社が取り組むSDGs

小さな子供たちが集まるようになったことで、今度はより安全な食べ物を提供したいという思いが芽生えた。リニューアルプロジェクトでは、神社を日常にしていこうというコンセプトを掲げていたため、次なる目標が普段づかいできる店をオープンすることとなった。「天然酵母パン職人で知られる伊藤幹雄さんにお手伝いいただけるこ

とになり、天然酵母と国産小麦にこだわったパン工房「ピッコリーノ」を、3年前に境内にオープンさせた。mico cafeの営業時間後に英会話教室も始めたため、お母さんと未就学児、さらには小学生の声も境内に響くようになっていきました。さらに昨年には、米をテーマにした創作料理のテイクアウト専門店「予祝」を境内にオープン。米粉のシフォンケーキやいなりをはじめ、店舗を切り盛りする女将がオススメする調味料の販売なども行っている。「私たちの活動はすべて、地域にお

ける神社のあり方を考える」という課題がベースにあります。山名八幡宮は安産と子育ての宮ですから、地域のお母さんやお父さん、そして子供たちが集う、昔の風景を取り戻していきたい。そのためには、継続性だけではなく、まずは現代風のアプローチでどう人が集まれる場所にしていくかを考えることが重要だと考えています。神社が本来あるべき姿をどう取り戻すかを追求する熱意と実行力。これが山名八幡宮を人が集まる場へと変えていった。

取り組み・事業

あそび場プロジェクト



神社の敷地内で アクティブな親子体験

神社の敷地内に公園を作り、流しそうめんを実施するなど親子で楽しめるイベントを不定期に開催。お父さんが活躍できる場を作ることを意識して、家族全員で参加できるように企画。

キッズマニティカフェ



お母さんたちの交流の場を 創造するカフェ

4年前にオープンした「mico cafe」では、お母さん向けのさまざまなセミナーを開催。ここでの出会いがその後、地域のお母さん同士の交流につながっていった。

英会話スクール



下校後の小学生たちを 英会話教室が迎え入れる

mico cafeの営業時間(午後3時閉店)後、NPO法人に場所を提供し、英会話スクール「まなばる -manapar-」も開講。小学校の下校時間になると、境内は子供たちの声があふれるように。

ベーカリー



食育を促す地産地消で 安全なパンを提供

安全な地産地消の食べ物を提供し、食育を促したいという思いから生まれた天然酵母のパン工房「ピッコリーノ」。高崎市内のデパートにも出店するなど人気を集めている。

放課後デイサービス



発達障害のある子供たちを 場所提供で支援

発達障害児の子育て支援を目的とした地域の放課後等デイサービス団体「はちまん」のために、境内にある旧宮司邸の一室を解放。2年ほど前から支援し続けている。

テイクアウト



カウンター越しに 地域の人たちを見守る

参拝後などに気軽に立ち寄れるテイクアウト専門店「予祝」では、カウンター越しに女将と地域のお母さんたちが会話を楽しむ様子も見られる。料理教室を行うなど、交流の場に。

なんばち縁起市



昔ながらの縁日で 地域を活性化

毎月第2土曜に「縁起市」を実施し、生産者には販売、地域の人には交流の場として神社を活用してもらっている。縁日には高齢者の参加も多く、地域全体の活性化に一役買っている。



山名八幡宮

〒370-1213
群馬県高崎市山名町 1581
TEL : 027-346-1736
https://yamana8.net/

サイクリストへのもてなしから 地域を巻き込む島興しへ

3 すべての人に
健康と福祉を

11 地方創生に
貢献する

13 気候変動に
具体的な対策を

解決に
つながる
課題



大人になってから久しく乗っていなかったが、サイクリストの目線を知るため、自転車を購入した巻幡宮司。乗り始めてからは全国に仲間が増えたという

人口流出が進む因島で 神社が活性化に奔走

広島県の因島は、しまなみ海道の北の入口に位置する。長く造船業で栄えたが、昭和61年に島の雇用の大部分を担っていた日立造船が撤退すると、若者を中心に島を出る人が続出、最大4万5000人いた人口が2万3000人ほどに減少してしまった。そこで島興しに向けた協議が始まり、数年に及ぶ話し合いの末、大山神社を含む島内の7寺社が協力し、「せとうち七福神」を平成7（1995）年にスタート。大型バスで観光客が一時的に増えたものの、バスの客は寺社以外に立ち寄ることがないばかりか、数年もするとまた訪問者が減っていった。ちょうどその頃、しまなみ海道には全国からサイクリストが訪れ始めていた。神社にも人が立ち寄るようになってきたため、巻幡俊宮司はサイクリストのために空気入れなどを置くサイクルステーションを神社内に設置。これだけでも参拝するサイクリストが増えてきた。また、神社には交通安全守護の和多志大神を祀る祠があるのだが、そこがいつしか「自転車神社」

神社発自転車ツーリズムが 島全体を巻き込む展開に

大山神社にも因島全体にもサイクリストは順調に増え、今では年間1万人が訪れるまでに成長。そこへ今度は、隣接する上島と因島との間に令和3（2021）年開通予定で橋が架かることになった。「造船業が衰退したあの頃とは違い、今ならもっと地域を活性化できると確信しています。だから次の一歩を踏み出すことにしました」。地元商工会議所などとも連携し、令和元年6

と呼ばれるようになり、神社の名はサイクリストの間で知られる存在に。「因島は造船業で潤っていたため、誰も観光について真剣に考えてきませんでしたし、観光客の受け入れ方もわかっていませんでした。しかししまなみ海道がアメリカのCNNによって世界で最も素晴らしい7大サイクリングコースに認定されると、サイクリストはさらに増え、これをチャンスに変えなければと考えたのです」。巻幡宮司は、サイクリストの気持ちとしまなみ海道サイクリングコースの魅力を理解するために自らロードバイクを購入。走っているうちに増えた仲間があるとき、自転車による島興しの話をしてきたところ、それなら環境保全や健康維持を含めた社会的な活動もした方がよいという声が集まり、平成27（2015）年、「しまなみサイクリングブリッジ」という団体を立ち上げ

月に「因島サイクルツーリズム振興協議会」を設立。新たな団体が誕生したことで、島には、自分たちでまぢを変えていく気運が高まっているという。「地道に活動してきた結果、少子高齢化、コミュニティの崩壊という島の課題、そしてそれを自転車を中心に島の人にも浸透してきました。ここから、生き生きとした島へと変わっていくのです」。神社を中心に、島の人も参加するようになったことで、地元主体のスピーディーな企画運営をめざしている。



大山神社
〒722-2323
広島県尾道市因島土生町1424-2
TEL：0845-22-0827
http://ooyama.sun.bindcloud.jp

取り組み・事業

自転車神社



しまなみ海道の入口で まず安全祈願をする

いつからか自転車神社と呼ばれ始めた和多志大神の祠。幟も参拝者から寄進されたもの。毎年5月に行われる自転車神社祭には全国からサイクリストが集まり、安全を祈願する

ルートの定期清掃



島の入口と出口を 走りやすい道に

島の南北には、しまなみ海道につながる道があるが、カーブが多く、落ち葉や落下物があると危険。そこで宮司を中心に「しまなみサイクリングブリッジ」の会員で年に2回定期清掃を実施

外国人の対応



世界に誇るコースでは 外国人にもいい思い出を

しまなみ海道を自転車で渡る外国人も年々増加。神社では多言語パンフレットを用意するほか、翻訳機などを活用して積極的に話しかける。神社でのいい思い出は、次の訪問客を連れてくる

イベント



サイクリストが楽しめる そんな神社でありたい

自転車神社祭では、神事はもちろん神職を交えての尻相撲など多彩な催しも人気。サイクリストが集い、仲間を増やせる場としても、神社は機能していきたいと考えている

新たな 取り組みも スタート

島の人たちが知恵を出し合い実行する 「因島サイクルツーリズム振興協議会」

観光による地域振興をめざし、 島の人が動いた

サイクリストの増加で島にはサイクリングチームも誕生。自転車を軸にした社会貢献を商工会議所とも相談し、「因島サイクルツーリズム振興協議会」が発足した。会は情報発信や地域資源活用、ルートの調査を含む走行環境整備、行政及び上島との連携といったチームを編成、個別に課題解決へ動くことにしている。メンバーには自転車に関わりたくない人も多いが、まちをなんとかしたい、という気持ちがある人が集まり、協議会という名前だが民間だけで活動していくという点も特徴的だ。めざすのは「地域にお金を落としてくれる仕組みづくり」をサイクルツーリズムで実現すること。加えて神社が、島南部の観光振興のゲートウェイとして機能することも想定している。令和2年から本格稼働し、各チームの課題解決による地域振興へ向かう。



祈祷参集殿はサイクリストの休憩場所でもある。訪れた人とのコミュニケーションも神職みんで行う。宮司たちと記念撮影して帰る人も多い



サイクリストが訪れるとまず出迎え、話しかける（写真右）。このフレンドリーな雰囲気もサイクリストを惹きつける大きな魅力。サイクリスト向けの授与品も企画した



寺社の活動はそのものがSDGs。地域に果たせる役割は無量大です

SDGsは寺社単体でなく、地域を面とらえて取り組むべきもの。では、そのポイントを理解するために必要な視点は何か、また寺社が取り組む意義はどこにあるのか。専門家に解説してもらった。

解説者



JTB 総合研究所 主席研究員 熊田 順一

訪日インバウンド事業および国連世界観光機関(UNWTO)での業務経験を活かし、世界情勢やトレンドを踏まえたマーケティング、ビジネスソリューション、調査を得意とする。SDGsの17の目標の中で、これから観光が果たす役割を「家族」「地域社会」「次世代」といった視点で考え、コンサルティング方針として掲げる。

すべての人に関係する
だから急速に広まる

SDGsでまず大切なのは「誰ひとり取り残さない」という包摂的な考え方です。核家族化からスタートした孤独死や子供の貧困といった日本の社会的課題を解決するなどの取り組みも含まれます。また、2030年までにSDGsを達成するという期限設定は「今の子供たちが過ごす未来の社会に対して、今の大人たちがきちんと責任を持つ」という仕掛けが組み込まれていることも、注目すべき点です。SDGs達成によって解決される課題は現代の若者にも他人事ではなく、彼らの未来に直結しています。だからこそ最近では、学校教育の分野でもSDGs教育に関心が高まっており、これから若者たちの間において、ますます

認知拡大していくでしょう。

地球上に生きているみんなが他人事ではない。それぞれの立場で、できる貢献を何かしら考えていけるのがSDGsの懐の広さであり、すべての人が自分事を感じられるからこそ、現在急速に広まっているのです。現状では、既存の活動に課題の番号を当てはめるだけの取り組みもあります。賛否両論ありますが、それでも持続可能性への認識が高まり、その中からSDGs達成に貢献する新たな活動が生まれてくるのであれば、現在の取り組みをSDGsゴールと一時的につなげることも肯定的に捉えていいのではないかと考えます。

ドミノのような連鎖を考え
無理なく取り込んでいく

どの目標を通じてSDGs達成に貢献するのは、国や地域によって

課題も違います。まず各地域の課題

をきちんと捉えたうえで、どの目標の達成に貢献するかという議論が生まれればいいのではないのでしょうか。取り組みの形として理想的なのは、自分が直面している課題を、解決する短期的なゴールと、地域や地球上で起こっている少し長期的な展望で達成したいゴールで考え、自分ひとり(または組織や企業単独)でなく、ドミノを倒すように、連鎖していくシナリオを描くことです。そうすれば無理なくSDGsを取り込めます。たとえばアフリカで給食制度を導入していくことは、まず「ゴール2」飢餓をなくすこと」の達成に貢献しますが、給食を出すことで学校に子供が来ることは同時に「教育水準を上げる」ことにつながり、最終的には「生活の豊かさ」につながっていきます。つまり連鎖して複数の課題を解

決していくことは、まず「ゴール2」飢餓をなくすこと」の達成に貢献しますが、給食を出すことで学校に子供が来ることは同時に「教育水準を上げる」ことにつながり、最終的には「生活の豊かさ」につながっていきます。つまり連鎖して複数の課題を解

決できるのです。そのようなシナリオを大なり小なり自分たちの地域で描きながら、ぜひSDGsへ取り組んでいただければと思います。

近年は多くの寺社でSDGsの勉強会が開催されています。これがドミノの最初になればいいのです。多くの人が集まり、話し合う場から次のステップが生まれてくれば、取り組みは広がります。またSDGsは、関わりのあるみんなで協力して課題を解決していくことが重要な要素でもあります。課題の17番にはパートナーシップがあります。地域の課題を解決するために地域内の寺社がひとつになり、地域の企業や団体を巻き込んで取り組むことも、寺社が地域に貢献できるきっかけを生み出していくのではないのでしょうか。

観光の観点からも
解決できることが多い

もうひとつ、SDGsへの取り組みで忘れてはならないのが観光の視点からのアプローチです。内閣府の地方創生テーマに「SDGs未来都市」というものがあります。ここで課題解決に取り組んでいる都市には、研修や修学旅行などで、SDGsを

通じて地域の課題解決への取り組みである姿を見に来てもらおうという志向が出ています。つまり地域に名所旧跡など従来型の観光コンテンツが少なくても、SDGs達成への取り組みを軸に新しい訪問目的が生まれつつあるのです。このような動きが加速すれば、SDGsはますます広まるでしょう。そこで、日本人にとって心の拠り所である寺社の存在がとて大切になります。歴史的に寺社に人が集ってきたのは、願いや、解決したい何かがあったからであり、寺社は地域の知の集積地でもありま

した。だからこそ現代では、課題解決の中心にすることが寺社の役割だとも考えられます。寺社の存在意義に地方創生のキーワードである「住んでよし、訪れてよしのまちづくり」を組み合わせると、旅行者と地域の人と一緒に楽しめる場や機会づくりが課題となります。地域の解決策を考える中心を、寺社が積極的に担う時代になったのではないのでしょうか。

け継がれてきた文化的な資産を、地域だけの力や財力でなくクラウドファンディングなども含めた外部の力と合わせることで、修復や再建などに必要な資金集めが可能になることもあります。だからこそコミュニティだけを見ていたまちづくりを、旅行者の存在も加えたまちづくりに変えていくのです。いろんな人を包摂しながらまちづくりや文化、社会を考えることが地域にとつてのSDGsの考え方のスタートになりますし、寺社がSDGsの考え方を理解・推進していく大きな理由だと言えます。

本誌で過去に掲載した事例

災害対応の宿坊を開設し地域の防災意識を高める

■平等寺(徳島県)「シームレス民泊」/本誌24号(下)

普段は通路宿、大規模災害発生時に要介護者を受け入れる「シームレス民泊」を開始。お寺が始めることで、地域の防災意識高揚につなげる。



SDGsの課題解決につながる寺社の活動は多彩

活動名	寺社名
現代版てらこや	NPO法人 全国てらこやネットワーク
塩釜市「災害自における施設利用に関する協定書」締結	鹽竈神社
あんの子ども食堂	紫雲山 西念寺
バリアフリーの取り組み	大本山中山寺
シームレス民泊	準別格本山 白水山平等寺
みんなの笑顔食堂	重点プロジェクト推進室
瀬戸内ジャムズガーデン	莊厳寺
サイクルツーリズムで持続的案地域の産業を	天津神明宮
おてらの電気	TERA Energy株式会社
寺co-working	長松山西源寺
宿坊+起業	定光山大泰寺

これまで「寺社NOW」で紹介してきた事例(上表参照)のなかにも、SDGsの課題解決につながるものが複数ある。つまり寺社の活動は、そのものがSDGsの課題解決の手段だと言えるのではないだろうか。

文化や伝統を未来へつなぐ、寺社を活性化させている人や活動。2つの事例を紹介します。

No. 1

「観音ガール」として 長浜の観音様を守り続ける 地域の人々の思いと共に よさを広めていく

観音文化の素晴らしさを
地域の思いと共に伝えたい

滋賀県長浜市は、人々が観音様を守り続ける独自の文化が生き続けるまち。ここで地域おこし協力隊として活動する対馬佳菜子さんは、「観音ガール」として、さまざまなメディアにも登場する。東京で生まれ育った対馬さんは、休日に各地の仏像を巡っていた。その中で惹かれたのが、長浜の観音文化。「このまちには、地域の人が観音様を拝み続けてきた風習があります。そこに魅力を感じ、移住を決意しました」。観音文化の発信に動き出した対馬さん。気付いたのは、拝み、守り続ける地域のひとと、訪れ、眺める観光客との

間の、観音様への思いのずれだった。「訪れる人は美しい」と見ます。しかし地域の人は、守ってきた観音様のどこに人が惹かれるのかわからない。そこで、まちの風習や守る姿ごと伝える必要を感じました。そのために、各地域の行事に顔を出し、少しずつ溶け込んでいった。出向いて調べ、話し、気付いたことはブログで発信。現在は各地域の人から信頼される存在として、観音文化を観光として活用したい行政と、地域のひととの橋渡しも務める。

「地域の人が観音様をどうしたいのか、その思いが最優先です。そのうえで、広めるためのお手伝いをするのですが、この活動は地域の文化を守っていくことにもつながると思います」

「地域の人が観音様をどうしたいのか、その思いが最優先です。そのうえで、広めるためのお手伝いをするのですが、この活動は地域の文化を守っていくことにもつながると思います」



令和元年10月には、井上靖著『星と祭』に登場する、長浜市を含む滋賀県内の十一面観音像を紹介するガイドブック「観音ガールと巡る 近江の十一面観音〜『星と祭』復刊プロジェクト編〜」が発行

No. 2

「Mattourism」を 楽しむことから 人のつながりを円滑にする 「祭・ism」の啓蒙へ

マツリテーターとして
人と地域を祭りでつなぐ

神社や寺などで行われる祭りを通して、人のつながりを生み出そうとしている団体がある。一般社団法人マツリズムだ。代表理事を務める大原学さんは、祭りのツーリズム(Mattourism)を通して、地縁のない人たちにも、「当事者」として祭りを楽しんでもらおうと、6年前に活動をスタートさせた。「既存の文化を壊さないように楽しむためには、適切なガイドが必要です。受け入れる側も、忙しい時にホスト役を担ってくれる人がほしい。祭りを通じて人と人、人と地域をつなげるファシリテーターになりたいという思いから、マ

ツリテーターを始めました」と、経緯を話す。参加した祭りは延べ40回、450名の参加者を引率してきた。「同じ祭りに2年、3年と参加するようになった頃、根本的な課題に直面しました。外部からの参加者が増えても、祭りを担う地縁組織の人が減っている。運営基盤を固めていくためには、地域の出身者や新たな住人を取り込むことが急務だったのです」。3年前に法人化するにあたり、祭りがつなぐ縁や仕組みの重要性を啓蒙する活動も始めた。「私自身、祭りのエネルギーに救われた経験があり、この文化を絶やしたくありません。数百年先まで続けるには何が必要か。そこに、寄り添える存在でありたいと思っています」



大原さんの原体験にあるのは、徳島県三好市の阿波踊り。踊りに熱中することで、そこに存在する見えない信仰をつなぐのが祭りののだと感じたそう

祭りの本当の楽しさを伝えたい、マツリテーター・大原 学さん



大学1年生の時に「プチ鬱、状態を経験した」という大原さん。辛い状況から救ってくれたのが、友人に誘われて参加した祭りのエネルギーだった。その原体験をもとに活動を広げている



数年にわたって参加している東京・墨田区にある高木神社の例大祭。祭りの担い手を増やす活動にも力を入れている



岩手の黒石寺蘇民祭にも2016年より参加。奥州市観光や地元のリ/ターナーとの交流会なども主催した

【一般社団法人マツリズム】
<https://www.matsurism.com>

長浜の観音信仰を、寺を守る人と共に広める対馬佳菜子さん



真言宗豊山派 石道寺にて。ここは住職を置かず、地域住民が寺と観音様を守り続けている。対馬さんが訪れた際には、2人の当番が観光客に仏像の説明などをしていった



石道寺の十一面観音像は国指定の重要文化財。対馬さんは寺を訪れ、観音像の撮影なども行っている



【観音ガール南無なむ日々】
<http://www.kannongirl.com>

各寺を訪れ、地域の人々の話を調べたことなどを自身のブログ「観音ガール南無なむ日々」で発信している

求められる場所に出向く サテライトな傾聴

弊誌28号で紹介した「坊主BAR」をはじめ、各地の寺院で、法要だけではなくイベントや多様な会が開催されるようになり、一般の人と寺院との距離が近づいている。しかし、僧侶との距離は、まだ少し壁があるようだ。たとえば「話を聞いてほしい」と思っている、それが寺院でできることを知らない人も多い。そんななか、「出かけて話を聴く」サテライトな傾聴活動が全国的に増えており、また注目されている。今回はそれらの活動事例から、傾聴が持つ可能性を考える



令和元年に発生した台風19号では、集会所で避難生活を送る被災者のもとへ地元の青年僧侶が訪問し、一緒に食事をしながら話を聞いた。緊張した日々を送るなか、避難者の顔もほころんでいる

地元の僧侶が地域の人の話を聴くことで
支援活動を円滑に

CASE 1 長野県豪雨被災地での傾聴活動

実は誰もが僧侶に話を聞いてほしがっている

多くの人が生きづらさを抱えていると言われる現代、カウンセリングや出会いの場で、誰かに悩みを聞いてほしい、できれば利害関係がない方が、と考える人が増えている。このような時こそ宗教者による傾聴が有効だと考えられるが、そもそも、宗教者に話を聞いてもらえることが広く知られていないかもしれない。江戸時代やそれ以前の村社会では、困りごとがあると寺社に相談することもあった。当時は村の生活の中心的存在だった寺社が、集落の話し合いの場としても活用されていた。それがいつしか祈りに限定された場となり、宗教者も話を聞いてもらえる存在から遠くなった。

ところが昨今、一般人が僧侶に話を聞いてもらえる場が、各地で増えている。しかもそこは寺院ではない。ニーズのあるところへ僧侶が出向く傾聴活動が目立っているのだ。この流れは僧侶個人、そして寺院にとって新たなご縁を結びに行く行為であり、そこから寺院と訪問者との関係性の未来も見えてくると思われる。

気心が知れた関係で
悩みを引き出し、つなぐ

昭和55(1980)年に曹洞宗の僧侶により立ち上がった活動を母体とする公益社団法人シャンティ国際ボランティア会では、阪神・淡路大震災以後、国内外の被災地で緊急救援活動や被災者支援に取り組んできた。そして、各地における支援活動を通して「被災者に寄り添う支援とは何か？」を考えるようになり、平成30(2018)年の西日本豪雨災害では、地元青年会と連携して、僧侶が中心となって傾聴活動を行った。令和元年の長野県豪雨災害でも、調査段階から長野県の宗務所や青年会、婦人会と連携を進め、避難所内や地域の公民館を回って傾聴活動を実施。被災者にとっても喜んでくれたという。

実施の際に大切にしていることは、地元の僧侶が話を聴くこと。疲れたり不安がる避難者を笑顔にするだけでなく、外部の人には言いにくいことでも地元で、しかも僧侶だからこそ言ってくれる悩みを聴くことができ、避難生活の不安など、内

右下/JR大阪直結のファッションビル入口では令和元年11月に「お坊さん喫茶」が開催(23頁)、超宗派の僧侶が相談者の話を聴いた。左下/浄土真宗本願寺派が有志で行っている「グチコレ(22頁)」は、京都市内の街角で愚痴を聞く



容をボランティアなどにつなぐことで、避難所などでの次の支援に生かすことができる。

長野市で活動に従事した僧侶であり、同会の国内緊急救援担当を務める渡邊珠人氏によると、「傾聴を行う僧侶は裏方であり、触媒として人をつなぐことや、支援活動に従事する他の団体、スタッフへ人々の思いをつないでいくことが自分たちの支援だと考えています」とのこと。

また、避難所での傾聴活動のように僧侶が寺の外へ出向いて行くことは、法要で見かける僧侶とは違い、たとえばスピーカーなど身近なところでも話せることで僧侶や寺院へのハードルが下がっていくのでは、と話す。加えて、世界的な課題解決策として多種多様な分野に多くの人が取り組むSDGs(11頁参照)にも関係してくる。目標11「住み続けられるまちづくり」の課題解決のひとつとして、災害からの回復力のある安全な都市や居住空間をつくることをめざすために、災害復興や被災者の心のケアの面で果たす役割が大きいとも考えられるという。



通りすがりの人の愚痴を聞き、社会課題の解決につなげていく

「グチコレ」の活動は、ブースを構えるのではなく、あたかも托鉢のように、街角に出没する。勧誘するのではなく「あなたの愚痴が聞きたいです」という看板の言葉に惹かれ、言いに来る人待



友人と2人で訪れて人生相談、墓じまいの悩みを打ち明けるなど、話したい内容はさまざま。傾聴する僧侶は、アドバイスを求められた際に経典にある言葉などを引用したという



商業施設の入口に僧侶による相談コーナーがある、ということオープン直後から店頭には多くの人が訪れていた

来場者は店頭の僧侶プロフィールを見て、話したい僧侶を選ぶ仕組み。利用料として30分500円が設定された



僧侶の活躍の場が広がるきっかけのひとつとして、企業との連携を实践

CASE 3 商業施設での傾聴イベント「お坊さん喫茶」

連日満席となった24名の僧侶による傾聴
JR大阪駅に直結している商業施設「LUCUA1100」は、若い世代の女性を中心に多勢が訪れる人気の場所。駅の改札口から徒歩数秒というビルのメインエントランスで令和元年11月1日から3日まで、「お坊さん喫茶」と題した傾聴イベントが開催された。これは同施設が公式インスタグラムに寄せられるユーザーのコメントからヒントを得てオープンする期間限定の店舗「妄想ショップ」のひとつ。今回は僧侶からの「お坊さん」と本当は気軽に話してほしいという投稿をきっかけに、「お坊さんに話を聞いてもらい、悩みを解決するサービスが5年後には一般的になっていくのではないかと考え、実施することになった。」
今回の企画には前身がある。平成30(2018)年に就労支援を手がけるNPO法人が「お寺deハレバール」と題した就活イベントを大阪市西区で開催。その際に「お坊さんによる人生相談」があったのだが、参加者アンケートで僧侶による相談に一定の社会的ニーズがある

ことがわかった。その後、この人生相談のことを知った「LUCUA1100」の担当者からNPO法人へ連絡があり、企画が実現。「お坊さん喫茶」には、超宗派の僧侶が3日間で24名参加。店頭には各僧侶の写真入りプロフィールを設置し、店頭で当日予約を受け付けた。反響は未知数だったが、結果的に全日程昼すぎには予約で満席になるほど好評で、日常の悩みを話す若い女性、終活の相談に訪れた高齢者など、さまざまな立場、年齢の人が僧侶と真剣に話をしていた。
今回の取り組みについて、僧侶側の窓口を務めた浄土真宗本願寺派の鶴野廣由氏は「全国各地で宗教者がさまざまなチャレンジを行っています。今回はNPO・企業・僧侶の協働で実現しましたが、これが今後企業などと宗教者が連携できる先例となり、僧侶の活躍の場が広がっていくと思っています」と言う。
利用者の多い商業施設で実施できたことは、多くの人に「お坊さん」にいるような悩みを打ち明けていいと知ってもらえるきっかけになったようだ。宗教者単独でなくても、連携が可能性を広げていく。

CASE 2 仏教を学ぶ有志による、街頭傾聴活動「グチコレ」

誰もが本音を言える第三の居場所として
平成24(2012)年に、龍谷大学や京都女子大学など京都で仏教を学ぶ学生が中心となり、浄土真宗本願寺派の協力を得て始まった傾聴活動「グチコレ」。現代社会における仏教の発信を模索するなかで、僧侶は寺で待つだけでなく街へ出て、リアルな悩みを聴くことが大切ではないか、と考えての活動だ。共感的な態度、正論・提案・批判をしない、相談者のプライバシーを守ることを原則とし、集めた愚痴をウェブサイトに「他力本願」で公開。これまでに愚痴を聞いてきた人の約8割が10〜20代だったという。近年では英語対応の看板、外国語対応スタッフの配置など、外国人相談者への対応を強化。また当初は京都駅前中心だった活動場所も、人の流れの多い河原町などを追加した。
「愚痴はもともと仏教語です。愚痴を抱える己の在り方を見つめ、愚痴を言い合うことでお互いを認め合える心豊かな社会をめざします」と、代表で龍谷大学大学院の安武慶哉さん。活動に参加するメンバーが心

がけているのは、グチコレを、誰もがほっとできる第三の居場所と捉えてもらうこと。「若いうちは女性の方が愚痴を多く言うものの、年をとると男性の方が多くなる傾向があります。中高年男性の孤立を痛感します」という相談者の傾向も見え、話を聴くことで社会課題にもアプローチできそうです。
また令和元年にはこの「グチコレ」が、JR京都駅のある京都市下京区の140周年記念事業のまちづくり部門で表彰された。下京区において、傾聴が地域と共に歩む活動にまで成長しているのは興味深い。
スタートから8年、代表を受け継ぎ、地道に活動を続けることの大切さを痛感しているという安武さんは「これからも、より多くの人の愚痴を聞ける場所へ出向いていきたい」と語る。今後は公園や観光地、商店街など不特定多数の人が集まる場所だけでなく、保育園や子育て支援施設、病院や福祉施設・イベントなど新たな活動場所を開拓し、積極的に出向いていく予定。無縁社会と呼ばれる現代で、つながりを実感できる場をもっと増やしていきたいと考えている。

【グチコレ(他力本願 net内)】 <http://tarikihongwan.net>

参道を ゆく

白山比咩神社が地域住民や白山市と共に歩む活性化策

地域のためになることを考え 観光施策に協力しながら信仰を広める



日本海側からもその姿がしっかり望める白山。山を源流とする水も、白山信仰の重要な要素



白山比咩神社の表参道。神社では北参道駐車場を利用する人に、表参道を歩いての参拝を勧めている

表参道前の空き家を活用し 地域住民が事業を開始

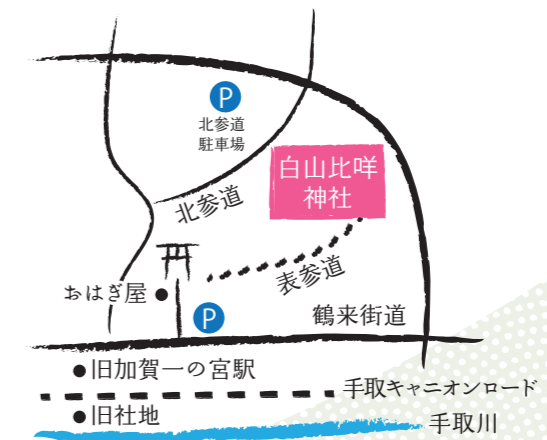
全国3000社を越える白山神社の総本宮として、また古くから加賀国の一ノ宮として崇敬を集めてきた白山比咩神社。富士山・立山と並ぶ日本三名山のひとつ白山を神体とする、白山信仰の拠点である。かつては北陸鉄道が門前の旧加賀一の宮駅まで走り、初詣や七五三の時には表参道に多くの露店が並び、賑わったという。しかし時代と共に神社付近の道路が整備され、マイカー利用者が年々増加してきたため、平成2(1990)年には北参道駐車場を拡張。さらに平成21(2009)年、北陸鉄道鶴来駅と加賀一の宮駅間が廃線となり、表参道から人の姿が激減した。とはいえ、表参道は神社にとって大切な場所…。

いた茶店が神社に
寄進されること
なったため、神社
がこの建物の活用
案を募ることに。

すると地域の事業
者10社が名乗り
を上げ、事業共同
組合として新たに
「おはぎ屋」を始め
ることとなった。

「神社は以前から、
地域の人のために何が
できるかを考えてきまし
た。建物の提供もそのひ
とつで、地元の方々の声
をとってもらう。と権禰
宜の田中天善さんは言う。

やがてパワースポットブ
ームが到来し、県外から若
い女性の参拝が増え始め
た。この機に神社と白山
信仰をより多くの人に知
ってもらえることを考えよ
う、ということになり、



鉄道でアクセスできた頃の表参道と、車でアクセスする場合の北参道。白山市内から手取川沿いにサイクリングロード「手取キャニオンロード」も整備されていて、アクセス手段は複数ある。現在はこれらがうまくリンクできていないようだが、旧社地一体の観光開発が進めば、北参道駐車場から表参道側へ回って表参道を歩くなど、新たな往来も生み出せそう

市の観光施策に協力し 地域活性と認知度アップへ

観光の活用についての検討が始まる。参拝者が増えれば、地域にも活気が出るからだ。そして平成20(2008)年の鎮座2100年のタイミングで禊場を造成、平成29(2017)年から白山市観光連盟と共同で禊体験ツアーを始めた。「今ではこのツアーに年間200名ほどが参加いただけになるようになりました。県外から参拝する人も増えていきます」。

増え、かつてのように参道を多くの人が歩く未来をめざしたいですね。旧加賀一の宮駅の裏はその昔、白山比咩神社が鎮座していた場所。白山市では、現在北陸鉄道の終点となっている鶴来駅からこの旧社地エリアで観光開発を進める協議も進めている。これが形になると、地域の人の願いでもある表参道周辺の賑わい再生にも、光が見えてくることだろう。

さらに今、観光を活用して神社と地域を元気にする、新たなプロジェクトが動き始めている。令和元年より、北陸信越運輸局が主体となり、北陸一帯の地域観光コンテンツ造成がスタートしたのだ。今年度中の観光商品化を目指してコンテンツの開発が進むが、白山市では「白山信仰息づく日常」がテーマ。白山比咩神社もそこに協力する形で、さらなる認知拡大をめざす。

「『白山信仰とは何か』をしっかりと伝えなければと考えています。それが地域の活性化にもつながるはずですよ。神社の存在感を観光という手法で広めることで、地域を訪れる人が



禊場に立つ田中天善さん(写真右)。青少年の健全な育成を目指して造成した禊場での体験は、白山を訪れる国内外の旅行者にも喜ばれている



おはぎ屋

地域の事業者が集まり事業共同組合を結成、20年近く空き家だった茶店を白山比咩神社から借りて運営している。「白山比咩神社のためなら一肌脱ぐ、その思いを持った人たちが頑張っています」と組合の村上治雄さん。店内では、地元のお土産も販売している。

〒920-2115 石川県白山市白山町レ122-1
TEL: 076-272-5510



鶴来地域で工芸品の会社を運営している村上治雄さん(写真右)。同じく地元の甘酒店がつくる三色おはぎ(左下)は店の名物で、平日でも売り切れることが多い。店は表参道の鳥居前にあり、一服処として週末には人で埋まることも



北参道駐車場も地域に開放。土産物店のほか、イベントも開催している。なかでも白山市観光連盟が主催し、白山市の山海の幸が楽しめる「うらら白山秋祭〜どんじゃら市〜」は、県内外から多くの人が訪れる人気のイベント



白山比咩神社
〒920-2114
石川県白山市三宮町ニ105-1
TEL: 076-272-0680
<http://www.shirayama.or.jp>



宿の入口からは富士山が見える。現在はバス道となっている大通りには金鳥居があり、ここから奥(富士山方面)が、かつて御師宿坊が並んでいた上吉田地区



大鴈丸一志さん、奈津子さんと3人のお子さん。家族も「御師のいえ」に暮らす。奈津子さんは大阪出身、結婚するまで富士吉田のことすらほぼ知らなかったが、今ではこの地に伝わる御師文化の奥深さにすっかり魅了されている



客間は全4部屋。庭に面下部屋(写真上)は大鴈丸家の家紋をあしらった障子がある。左は今回新たに設けたカフェスペース



大通りから細道を歩き、宿へ。御師宿坊には道に面した「町御師」と奥まった「古御師」があり、こちらは古御師。宿の手前に小川があり、かつてはここで身を清めて上がっていた



かつて富士講の道者は御師の家で休息を兼ねて身を清め、翌朝富士浅間神社(写真上)へ参詣後、富士山頂をめざした。「御師のいえ」の改修では、かつての表玄関(写真左)はそのまま残り、実際の出入りは左のガラス戸から。室内はまず板の間があり(写真右)、隅にはかつて宿坊で使っていた調度品や御師装束などが飾られている

テラハク
レポート

自分のルーツを
見直し、
文化の継承を決意



おがんまる
御師のいえ 大鴈丸
hitsuji guest house
& cafe

〒403-0005
山梨県富士吉田市
上吉田 7-12-16
TEL: 080-1525-9515
※12月～3月は冬期休業

廃れゆく文化を 残すための御師宿坊

御師宿坊の文化を
富士山信仰と共に伝えたい

日本一の霊峰富士山へ信仰のために登山する人々を富士道者^{どうしや}といい、その世話をし、自宅を宿坊として提供していたのが富士御師だった。御師は御祈禱師の略称で、世話だけでなく、富士山信仰を広める役も担っていた。江戸時代には富士山参詣が一大ブームとなり、富士吉田市の上吉田地区は、最盛期に86軒もの御師宿坊が並んでいたという。

御師宿坊の運営を成り立たせていたのは富士山参詣の「講」の存在だったが、時代と共にそれが消え、

立ちゆかなくなった御師宿坊は次々に姿を消していった。現存している御師宿坊は4軒、そのうちのひとつ「御師のいえ 大鴈丸」は、外国人登山者も訪れる場所だ。宿を守るのは、御師の大鴈丸家第18代目、大鴈丸一志さんと奥さんの奈津子さん。一志さんは木工職人だが、かつて全国を旅して回ったことで自分のルーツを見直し、地元に戻ることを見意。やがて奈津子さんと結婚、平成28(2016)年よりゲストハウスとして再スタートさせた。

「私が戻ってきた時にはすでに道者を受け入れておらず、建物も老朽化して父が取り壊しを考えていまし

た。しかし御師文化が生きるこの建物を残したい。そんな折、富士吉田市から御師宿坊を対象とした助成金が出ることになり、宿泊の復活を決意しました。御師宿坊は歴史的に、受け入れ人数の増加に合わせ増改築を繰り返してきた。「だから今回も、時代に合わせて少し姿を変えました」。かつての趣をできるだけ残すため、改築は最小限に留めた。板

に触れたという奈津子さん。「御師の文化も宿坊も、時代に合わせながら守っていく。いまはこれが夫婦共通の目標になっています」と話す。

の間にミニギャラリーを設け、和室だったスペースを奈津子さんが週末に開けるカフェに、そのほかは浴室に手を入れた程度。

地元には、同じように御師の家を継いだ同世代がもう1軒。父親は御師で構成される組織「御師団」のメンバーだが、その活動もやがて受け継ぐことになる。御師文化の伝承を担う立場になる前に学ばなければということで、先輩御師宿坊を加えた3軒で勉強会を立ち上げ、御師文化の理解を深めているそう。また、存在を知ってもらうために宿でワークショップも開催している。

地域で文化を受け継ぐ
きっかけとしても活動

嫁いで来て初めて、御師の文化に

文化伝承の重責を担うと心を決めた次世代が、自分たちらしい形で宿坊を運営していく。



広島県尾道市の大山神社(14頁)には、世界中からサイクリストが訪れる。考え、行動するのは観光で因島を訪れるすべての人が楽しみに、それが地域活性につながってほしいから。アイデアが神社も地域も元気にする。寺社がSDGsに取り組む理由は、ここに尽きる

寺社Now

Vol.29

編集後記

国連世界観光機関 (UNWTO) と国連教育科学文化機関 (UNESCO) 主催の国際会議「国連観光・文化京都会議 2019」に参加した(10頁)。全体テーマは「将来世代への投資～観光×文化×SDGs」。観光が地域固有の文化コミュニティを継承発展させる力になりうると確認した。(W)

寺社は存在そのものがSDGsだと言われる。そこから一歩踏み込んで、参拝者や地域とどんな未来をめざすのかを考える。ここに、寺社と地域の持続可能な形をつくるヒントがあると、取材を通して実感した。寺社は人をつなぐ存在、その重要性はSDGsに取り組む際の大きな力となる。(H)

無料送付の継続希望

「寺社Now」無料送付の継続をご希望の場合、[寺社名・氏名・住所・電話番号]をご記入のうえ、下記FAXまたはメールアドレス宛にお送りください。ご意見・ご感想もお待ちしております。



バックナンバーがWEBでご覧いただけます

jisya-now.com

または 寺社NOW 検索

お問合わせ

一般社団法人
全国寺社観光協会 本部事務局

TEL: 06-6360-9838 FAX: 06-6360-9848
e-mail: info@jisya-kk.jp

次号は
2020年3月発行の
予定です。

監修
一般社団法人 全日本寺社観光連盟

発行人
一般社団法人 全国寺社観光協会

編集・制作協力
株式会社 glass

発行所
一般社団法人全国寺社観光協会事務局
〒530-0044
大阪府大阪市北区東天満 1丁目11番13号
AXIS 南森町ビル 11F
Tel: 06-6360-9838 Fax: 06-6360-9848

寺社 Now
第29号 令和2年1月発行
本誌の表紙、記事、写真、イラストはすべて著作権法で保護されています。発行人の許諾なしに複写(コピー)したり、印刷物やインターネットのWEBサイト、メール等に転載することは違法となります。



寺院編

右で紹介している外国人の問題行動。そのなかで出発前に立ち寄り、静かに手を合わせる中国人夫婦の姿も映る。他者のことを考える「まなざし」の必要性が伝わっている。



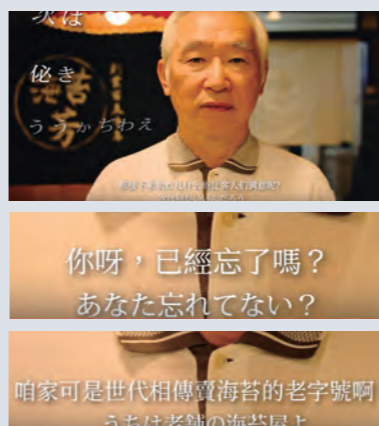
路地編

路上喫煙や食べ歩きをしている外国人が、街で会った舞妓に写真撮影を迫るシーン。登場人物の心の中を覗いてみると、撮影禁止だと知らず、つい気分が高ぶって大きな声になった、ということだった。相互に認識や理解の不足が存在していることを表現。



商店街編

商店街で串料理を食べる外国人。串料理を提供する店主、常連だった日本人が登場するのだが、心の中は、元来は串料理の店ではないのに観光客向けにウケ狙いのメニューが出るようになり、業態が変わったことで足が遠のいた常連客のもの。安易な迎合が取り返しの付かない結末を招いてしまっている。



「商店街編」のエンディング。串料理を提供する店は本来、老舗の海苔店だった。本業を忘れ、「次は何がいいんだろう」と新たな串料理の考案に必死な主人に、横から妻が「あなた忘れてない?」「うちは老舗の海苔屋よ」と諷刺している

外国人への マナー啓発と心意気や、 見方を変えると…

■ 訪日外国人向け啓発動画 「Seeing differently」



製作/一般財団法人関西観光本部
監督・脚本/ハナムラチカヒロ

問題行動の要因は何なのか?

寺院の本堂で静かに手を合わせる外国人女性。ところがその隣には水を飲みながら大声ではしゃぐ、携帯を触る、帽子を被ったまま座る、本堂をバックに記念撮影をするといった態度の外国人参拝者の姿。コーヒを飲みながら本堂へ向かい、階段脇にカップを置いて本堂に入る外国人男性の姿も見える。

動画はここから、外国人の心の声を字幕に写し出しながら、映像を巻き戻す。飲み物を本堂に持って入れないことは知りつつ、ゴミ箱がないから階段脇に置いた、撮影禁止という日本語が分からなかった、本堂内で帽子を被ってはいけないと知らなかった、つい携帯を触り、大声を出してしまった、飲食禁止と知らなかったなど、さまざまな事情や要因があるようだ。

しかしこうした心の声を知ると、我々が当たり前と思っていることが実は外国人には伝わっていない、問題行動の一因にはコミュニケーション不足があることに気付く。冒頭で静かに手を合わせていた女性の心の声は「静かなお寺だと思って来たんだけど…。彼女の視線の先には、やむなく仕事の電話に出てしまっている日本人男性。つまり問題行動は外国人だけではない、という逆転した結末が待っている。

これは一般財団法人関西観光本部による訪日外国人向けマナー啓発動画のひとつ「寺院編」。「Seeing differently」をテーマに、日本の文化や観光マナーについて、訪日外国人と地域の人々がどうあるべきか、一緒に考えることを促すことを目的としている。「路地編」「商店街編」も公開されていて興味深い。



挑戦の 数だけ、 保険が ある。

保険は、冒険から生まれた。
大航海という挑戦を助けるために、
勇気をつくるために、
保険は生まれた。

さあ、挑戦しよう。
人は何かを始めることで前へ進み、
世界は新しく変わってゆく。
不安も、きっとあるだろう。
でもそれは、分かち合うことで軽くなる。

世の中には2種類の人がいる。
挑戦する人、しない人。
充実した人生を送るのは、
どちらの人だろう。
人から愛され尊敬されるのは、
どちらの人だろう。
世の中を変えていくのは、
どちらの人だろう。

私たちはすべての挑戦を応援します。

To Be a Good Company
東京海上日動



JOCゴールドパートナー(損害保険)